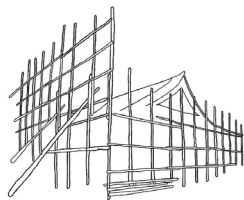
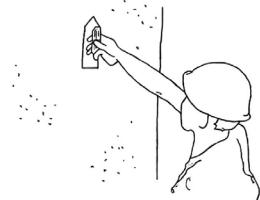


鳶とび



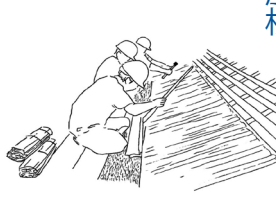
建物の修理の時には、建物を風雨から守り、作業の効率性を高めるため、仮設の素屋根を設置します。伝統的な手法である丸太組足場は、作業用の足場の幅や高さを自由に設定できるなどのメリットがあります。また、丸太組の技術を、後世に伝承する意味合いもあります。

左官さかん



天然の材料を扱うため、土の性質、土地の気候条件、壁の厚さなどによって、材料の持ち味を最大限に活かす工夫をします。土壁だけでなく、伝統的な土間に用いられる三和土も、左官職人が土を何度も叩き締めて仕上げます。

屋根やね



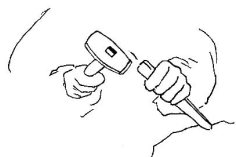
建物の屋根を覆う材料には、瓦・檜皮・柿・茅など、色々な種類があります。いずれも専門の職人が、美しい曲線をもった屋根をつくりあげます。

木工もくこう



文化財建造物を修理する際には、丁寧に解体を行い、部材一つ一つを修理していきます。大工は、伝統的な技術・工法・知識等を受け継ぎ、発展させ、木という自然の材料に向き合います。京都府には木工技術を持つ職員が所属しており、多くの文化財建造物の修理を行っています。

石工いしく



日本では、仏教の伝来により、建物の礎石や基壇などに石材が多用されるようになりました。こうした石材には、自然石をそのまま用いる場合と、加工した石を用いる場合があります。また、石塔や石像、灯籠、階段などにも石材が用いられるほか、庭園の景色の要素としても石は欠かすことができません。

表具ひょうぐ



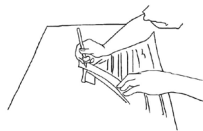
建物の内装に用いられる襖などは、表具と呼ばれ、紙や絹といった繊細な材料が用いられます。さらに、表面に絵画などが描かれる場合もあり、修理の前には状態や材料の調査を行ったうえで修理の手法を選択し、慎重に作業を行います。

畳たたみ



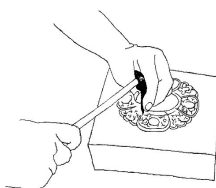
江戸時代には民家にも広く普及し、多くの文化財建造物にも用いられる畳は、「畳表」、「畳床」「畳縁」からできています。伝統的な畳の工法では、それぞれの材料をしっかりと吟味し、手縫いで仕上げを行います。また、修理の際は、畳床などができる限り再利用します。

文化財建造物 保存修理 技術者ぶんかざいけんぞうぶつ ほぞんしゅうり ぎじゅつしゃ



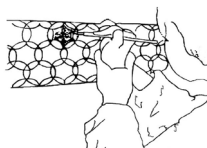
修理の計画策定、建物の調査を行い、修理を監督します。建物の調査だけでなく、必要に応じて古文書調査を行うなどして、建物の歴史を解き明かします。また、修理の内容は保存図や報告書として記録します。

金物かなもの



建物の部材を組み立てる際に使われる和釘は、現在の鉄釘とは違って鍛造(金属を槌で叩いて鍛える製法)されています。また、錆金具は建物を華やかに装飾するとともに部材を保護します。いずれも、修理の際は丁寧に取り外し、できる限り再利用します。

彩色塗装さいしきとそう



彩色は、建物を華やかに装飾するとともに、木部が風雨で傷むことから守ります。彩色修理の際には、斜光ライトや赤外線写真を使った調査を行い、元の通りに修理します。

建具たてぐ



扉や欄間等の建具は、全て建物毎に作られ、様々な種類、大きさがあります。その修理を行うには高度な技術が必要です。京都府には、建具技術を持つ職員が所属しており、多くの建具の修理を行っています。